

(統計史料でみる昭和・平成期【その2】附録2)

寅さんと昭和 55 年国勢調査

奥積 雅彦 (総務省統計研究研修所教官)

【はじめに】

映画「男はつらいよ 寅次郎かもめ歌」は、その公開日(昭和 55 年¹⁹⁸⁰年 12 月 27 日)が国勢調査の実施年であったためか、国勢調査に関するシーンがあります。その概要等を紹介します。

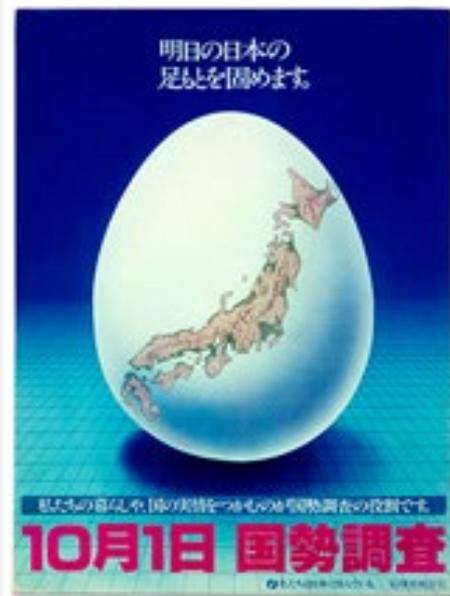
ちなみに、昭和 55 年国勢調査は、人口の高齢化が注目されるなかで実施され、高齢者に関する統計表の充実も図られました。

『男はつらいよ 寅次郎かもめ歌』DVDジャケット



発売販売元：松竹 ©1980 松竹株式会社

昭和 55 年国勢調査のポスター



【写真】総務省統計局HP(国勢調査のあゆみ)

一口メモ

国立国会図書館オンラインで「男はつらいよ 寅次郎かもめ歌」を検索したところ、映像資料が3件ヒットしました(東京本館所蔵)。

【国勢調査のシーンの概要】

寅さんの実家に国勢調査員が訪ねてきて、おいちゃんたちは、留守がちの寅さんのことを調査票に記入すべきか迷って、調査員に尋ねたところ、調査員は、そういう場合は、現在いる場所で調査することになるとのことでした。そうこうしているうちに、たまたま寅さんが帰って来ました。おいちゃんが調査票に氏名、年齢など必要事項の記入を促すも、寅さんは、「俺は、別に悪いことなんかしちゃいないからな。」と不快感を示しました。妹のさくらさんが誤解を解くべく、「そんなんじゃないわよ。国勢調査よ。」と伝えるも理解を示さず、おいちゃんが「これ書かないと日本の人口から外されちゃうんだぞ」というと、寅さんは「外されたっていいよ」と聞き直ります。結局、妹のさくらさんが書いておくことになりました。

【このシーンの意義】

このシーンは、国勢調査は、常住地主義を原則としつつ、原則に当てはまらない場合は現在地で調査することを端的に表しています。寅さんのように仕事の都合で長期間、各地を転々とし、常住地の特定が難しい場合は、国勢調査をどこで受けるかについて、いいケーススタディとなると考えられます。

【国勢調査の対象と場所について】

国勢調査は、西暦の末尾が0と5の年の10月1日現在で、世帯を単位として調査します。世帯とは、住

居及び生計を共にする者の集まり又は独立して住居を維持する単身者をいいます。国勢調査では、住民票などの届出場所に関係なく、10月1日現在、ふだん住んでいる場所で調査します。ここで、「ふだん住んでいる場所」とは、3か月以上住んでいる場所か、3か月以上にわたって住むことになっている場所をいいます。出張、出張、旅行などで一時的に自宅を離れている人は、自宅を不在にする期間が3か月未満の場合は自宅で調査し、3か月以上にわたる場合はその出張先や旅行先で調査します。出張先の宿泊まりする場所が一定であれば、その出張先で調査することになりますが、寅さんのように、出張先の宿泊まりする場所が一定していない場合は、10月1日現在いる場所で調査し、少しでも自宅に帰ってくる場合は自宅で調査します。もし興味がありましたら、総務省統計HP「令和2年国勢調査に関するQ&A(回答)」の「3. 調査の対象と場所について」をご覧ください。

【国勢調査員のフィールドワークについて】

国勢調査は人口を漏れ重複なく把握するため、国勢調査員のフィールドワークによって支えられています。そのフィールドワークは決められた方法で、全国一斉にどこを切っても金太郎アメ方式で行う必要があります。直近の令和2年(2020年)国勢調査では、調査員が配布した調査票に必要な事項を記入して後日、国勢調査員に提出する方法又は郵送提出する方法、オンラインで回答する方法が選択でき、便利なオンライン回答が推奨されました。国勢調査の調査方法は時代とともに変化してきました。もし興味がありましたら、総務省統計HP「国勢調査100年のあゆみ」をご覧ください。

【雑感】

おそらく、50年後の国勢調査は、筆者の想像をはるかに超えた、高度なデジタル技術を活用した方法で、実施されていると思います。ただ、国や地方自治体と国民の関係について社会全体で議論すべき課題もあるように思います。忌野清志郎さんの歌「宇宙大シャッフル」のように、「♪…どうしたんだ未来…♪」とならないことを願って…。

【余談1】

昭和55年(1980年)国勢調査は、筆者にとって感慨深いものがあります。戦後、旧統計法(昭和22年法律第18号)に基づく国勢調査については、昭和25年以降、その実施に関する政令が実施年ごとに定められ、政令名も昭和〇年国勢調査令とされていました。昭和55年国勢調査の実施に際し、法令の整理等の観点から、国勢調査の実施に関する政令を恒久化することとされ、国勢調査令(昭和55年政令第98号)が制定されました。当時、筆者は、制定に伴う補助的な単純作業のみタッチしていましたが、法令の制定過程で先輩の労苦を傍で目の当たりにすることとなりました。その後の筆者の公務員生活において、統計局や制度官庁で統計に関する法令の制定に伴う底辺の作業が生業となるとは予想できませんでした。その意味で昭和55年は、筆者の公務員生活のターニングポイントであったように思います。

【余談2】

休日に葛飾柴又寅さん記念館を訪れたところ、寅さんの履歴書*が展示されていました。現住所欄は「不特定」、職歴欄は「職業・自営業」とされていました。

履歴書をみる限り国勢調査の調査事項である従業上の地位(勤めか自営かの別)は、個人業主であると考えられます。国勢調査では個人業主については、雇人のある業主か雇人のない業主かの設問になっていますが、履歴書からは不明です。産業と職業は、寅さんのいくつかの映画をみる限り、露天商的な業態のようなので産業は小売業、職業は販売従事者(個人業主)と考えられますが、これも履歴書からは不明です。

履歴書の下部をみると、得意な学科は「音楽・国語」、健康状態「きはめて良好」、趣味「観劇・旅行」、スポーツ「競馬・競輪」とされていました。冷静に考えると、スポーツについては、好きな種目を書くのか、実際に行っている種目を書くのか悩ましいところだと思いました。この履歴書を拝見して、職業柄、調査票の設計に際しては、あいまいな表現やミスリードの回避に留意する必要があることを改めて痛感しました。

一口メモ

映画「男はつらいよ 寅次郎かもめ歌」の定時制高校のシーンは、寅さんの向学心を感じとることができました。そして、このことも筆者に統計を理解するための基礎数学の学び直しを決意する契機を付与することとなりました。今回、本コラムと同時に統計を理解するための学び直しに関する統計図書館コラム【No.P03】～【No.P09】も公開しました。興味がありましたら、ご覧ください。

* 展示プレートの解説をみると、履歴書の用途は、「寅次郎かもめ歌」における「定時制高校の入学願書として…」とされています。